

ヴァイシェーシカ学派における sukha と duḥkha の考察

佐藤 隆大

本論文では、ヴァイシェーシカ学派における「喜び」(sukha) および「苦しみ」(duḥkha)⁽¹⁾の概念の検討を行った。「喜び」と「苦しみ」の本質は何かということは、インド哲学史上学派を問わず常に議論されていた問題であり、ヴァイシェーシカ学派もその例外ではない。1997年の Wilhelm Halbfass の研究⁽²⁾において、同学派の文献における「喜び」の概念が検討された。本論文では Halbfass の研究を踏まえつつ、以下の二点を明らかにすることを試みた。第一に、Halbfass の研究では「喜び」の対概念である「苦しみ」に関する言及が無かった点を踏まえ、本研究では「喜び」及び「苦しみ」双方の検討を行い、両者の関係性を明らかにした。第二に、ヴァイシェーシカ学派の「喜び」と「苦しみ」の定義を、同時代の他学派の定義と比較し、その相違点を考察した。本論文の第一章では、以上のような問題の所在と、従来の研究の概要を述べた。

本論文で考察した議論に入る前に、ヴァイシェーシカ学派の哲学の概要と、「喜び」・「苦しみ」の位置付けを簡単に述べたい。同学派の思想は、世界に存在するあらゆる現象を「言葉の指示対象」(パダールタ, padārtha) と呼ばれるカテゴリーに分類し、それらを個別の实在的要素とみなして説明する点に特徴がある。彼らは、一切の現象を六つのカテゴリー(実体・属性・運動・普遍・特殊・内属)のいずれかに分類し、それらのカテゴリーに属する現象は総て「あるという性質」、「命名されるという性質」、「知られるという性質」を有するものと定義している⁽³⁾。同学派の分類上、「喜び」と「苦しみ」は「属性」のカテゴリーに収められる。他に「属性」のカテゴリーに分類されるものには、色や味、香りや感触等がある。これらの例からも分かるように、「属性」はそれ単体で現実世界に存在するのではなく、必ずそれが拠る所とする基体、すなわち「実体」に内属することで存在するとされる。このような「属性」と、それに含まれる「喜び」と「苦しみ」に関する基本的な考え方は、ヴァイシェーシカ学派のあらゆる文献において共通のものである。それを踏まえて、本論文では関係諸文献における個別の記述を検討し、相互の比較を試みた。

本論文の第二章と第三章では、ヴァイシェーシカ学派の文献における「喜び」および「苦しみ」に関する記述を訳出し、両者の概念を明らかにした。本論文で用例の検討を行った文献は、『ヴァイシェーシカスートラ』、『パダールタダルマサンガラハ』、『ヴィヨーマヴァティー』、『ニヤーヤカンダリー』の四つである。そのうち、最初期(具体的な年代は明らかではないが、西暦150年頃にはスートラの原型が成立したと考えられる⁽⁴⁾)の文献である『ヴァイシェーシカスートラ』においては、後代の文献に比して「喜び」それ自体を論じた箇所が極めて少ないということが明らかになった。また、「苦しみ」については、その全ての用例が「喜び」との複合語の形でのみ確認され、「苦しみ」自体に関する説明が無いという点が明らかになった。

一方、後代に成立した『パダールタダルマサンガラハ』(成立年代については議論されているが、およそ5-6世紀頃⁽⁵⁾)ならびに、同文献に対する註釈書である『ヴィヨーマヴァティー』(10世紀頃⁽⁶⁾)

と『ニヤーヤカンダリー』(991年⁽⁷⁾)では、「喜び」と「苦しみ」に関してより詳しい説明がなされるようになった。そこで、本論文の第二章と第三章の前半では、それぞれ『パダールタダルマサンクラハ』における「喜び」と「苦しみ」に関する記述の検討を行った。また、各章の後半部分では、引用内の意味が不明確な語句に関する同文献の他箇所用例と、註釈文献の用例を訳出して、考察を行った。以上の作業を通じて、従来対立する概念であると考えられていた「喜び」と「苦しみ」に関して、一方を他方の非存在によって定義するような他学派の見解をヴァイシェーシカ学派は斥け、双方を独自の存在として理解していることが明らかになった。

続いて第四章の前半部では、『パダールタダルマサンクラハ』において「喜び」と「苦しみ」を特徴づけるものとして言及されていた「恩恵」(anugraha)と「損害」(upaghāta)という語が示す意味について、ヴァイシェーシカ学派の文献内の用例を訳出し検討を行った。『ヴァイシェーシカスートラ』においては「恩恵」と「損害」の用例が一切見られないが、『パダールタダルマサンクラハ』においては、ヨーガ行者たちにおける直接知覚が説明されている一箇所においてのみ、「恩恵」の用例が確認された。ここでは、ヨーガ行者たちの思考器官が、「恩恵」という作用によって、自己のアートマンをはじめ、この世界に存在するもの全てに関して誤りなく本質を認識することが出来るようになるということが述べられていた。ここにおいて、「恩恵」という言葉は、ヨーガによって得られる、修行者の思考器官の認識のレベルを引き上げる作用を示していると考えられる。また『ニヤーヤカンダリー』においては、ヴァイシェーシカ学派と、ヴェーダーンタ学派と思われる対論者との議論の箇所に「恩恵」の言葉が見出されるので、同箇所についても訳出を行った。一方、「損害」については本論文で取り上げた文献中に用例を見出すことが出来なかった。

以上のように、ヴァイシェーシカ学派における「恩恵」と「損害」の用例は、「喜び」と「苦しみ」に関する言及に比して極めて少ないものであった。そのため、『ヴァイシェーシカスートラ』においては「恩恵」と「損害」の用例が見出されなかったにもかかわらず、なぜ後代の文献では「喜び」と「苦しみ」がそれぞれ「恩恵」と「損害」という言葉を用いて特徴づけられるようになったのか、また、これらの概念はどのような意味を持つのか、ということと同学派の文献のみから理解することは困難であった。そこで、第四章の後半部では『ヴァイシェーシカスートラ』と『パダールタダルマサンクラハ』が成立した時代の前後に成立したと考えられる仏教文献を中心に、関係の用例を検討した。仏教文献における「恩恵」と「損害」に関しては、まず他者に対する施としての「恩恵」、あるいは不利益を及ぼすという意味で用いられている「損害」を、『唯識三十論』や『中辺分別論』の用例から検討した。また、これらの文献では、「恩恵」とは菩薩が行う布施の行為の一つであるという記述も見出された。一方、『金剛般若経』においては如来・阿羅漢が施す「恩恵」は、最大の「恩恵」であると説明されていることを確認した。これらの「恩恵」および「損害」の用例は、直接「喜び」や「苦しみ」に関係のある文脈に見出される訳ではない。しかし、「恩恵」については「補助する」、「恩恵をもたらす」という用例が見出され、「損害」においては「不利益を及ぼす」という意味で用いられている例が確認された。

さらに、身心に関する利益・損害としての「恩恵」と「損害」の用例を、禪定時における修行者の身心の快適感やアーヤ識と身体の関係に関する山部能宜の論文⁽⁸⁾を立脚点として、『阿毘達磨雜集論』と『瑜伽師地論』に確認した。これらの文献においては、「恩恵」と「損害」は「喜び」・「苦しみ」と強い結びつきを持つ言葉として述べられており、このことは『パダールタダルマサンクラハ』が成立するまでの時代において、既に「喜び」と「恩恵」、「苦しみ」と「損害」とが関係づけられていたことを

優秀修士論文概要

示唆するものであった。一方、今回引用した仏教文献には、「喜び」を身体的な側面と心的な側面に分けていたり、また身心の両者において「恩恵」と「損害」が存在すると論じていたり、ヴァイシェーシカ学派の文献には見出されない見解があった。こうした記述の背景には、禪定という実践的な修行方法への関心があったために、とりわけ身体と心に生じる喜びを分けて論じる必要が生じたのではないかと筆者は考察した。

以上のように、本論文ではヴァイシェーシカ学派の諸文献における「喜び」と「苦しみ」の定義と、彼らの思想体系における両概念の位置付けを明らかにすることを目的として両語の用例を訳出し、検討を行った。本論文では10世紀以前のヴァイシェーシカ学派の文献における用例のみを扱ったため、特に後代のニヤーヤ・ヴァイシェーシカにおける定義について言及することができなかった。同学派の10世紀以降の「喜び」と「苦しみ」に関する思想の発展を論じる上で、このニヤーヤ・ヴァイシェーシカの議論はとりわけ重要なものであると考えられる。そのため、本論文で考察の対象とした10世紀以前のヴァイシェーシカ学派の見解との共通点や相違点の検討を、今後の課題としたい。

注

- (1) 「喜び」と「苦しみ」は、ここではヴァイシェーシカ学派が定義する「属性」に含まれる概念を示す用語を指し、一般的な意味とは異なるため、本稿では括弧を付した。
- (2) Wilhelm Halbfass, *Happiness: A Nyāya-Vaiśeṣika Perspective.*, in *Relativism, Suffering and Beyond Essays in Memory of Bimal K. Matilal*. Delhi: Oxford University Press, 1997, pp. 150-163.
- (3) Word Index to the *Praśastapādabhāṣya*: a Complete Word Index to the Printed Editions of the *Praśastapādabhāṣya*. Ed. Johannes Bronkhorst, and Yves Ramseier. Delhi: Motilal Banarsidass, 1994, pp. 3-4.
- (4) 金倉圓照『インドの自然哲学』平楽寺書店, 1971, pp. 14-23.
- (5) 同上, pp. 40-41
- (6) K. H. Potter (Eds.), *Encyclopedia of Indian Philosophies Vol.2 Indian Metaphysics and Epistemology: The Tradition of Nyāya Vaiśeṣika up to Gaṅgeśa*. Delhi: Motilal Banarsidass, 1977, p. 424.
- (7) 同上, p. 485.
- (8) 山部能宜「アーラヤ識説の実践的背景について」『東洋の思想と宗教』, 2016, pp. (1)-(30).